

ごしまで分かった だいせんじ そうぼう 大山寺僧坊跡!!

大山寺には、草木が茂る広い平坦地となつている「僧坊跡」がたくさんあることは以前から知られていますが、その実態はあまり分かつていません。大山の魅力や価値を高めるために町教育委員会では、大山寺の歴史、とくにこれらの「僧坊跡」の内容を把握するために、平成16年度から大山僧坊跡調査委員会を設けて以来さまざまな分野から総合的に調査を進めています。今回は、測量調査及び発掘調査の成果について紹介します。

測量調査の成果

大山寺は江戸時代初めに「三山三院四十三坊」の体制が整えられ、人々から厚く信仰されてきましたが、それよりも前の中世期（平安末～戦国末）に、多くの僧坊が建つて隆盛を誇つたと伝えられています。教育委員会では、その頃に僧坊が建立された範囲がどこまで広がっていたのか、現地を歩きながらその痕跡を確認する踏査を実施し、その踏査結果を盛り込んだ測量

上一帯を中心に広がっています（図中で色を付けたものが僧坊跡などです）。

絵図との比較から

大山寺僧坊が描かれた絵図には、寛政9（1797）年の「伯角盤山大山寺絵図」（片山楊谷画）、江戸後期の作とされる「伯州大山略絵図」（堀田里席（写画）、明治3（1870）年の「大山寺領絵図」（雲城画）の3つがよく知られています。絵図に描かれた僧坊・堂・神社・棟前後ありますが、測量調査ではその約3倍に及ぶ数の建物跡と考えられる平坦地を確認したことになります。

この図から、僧坊跡が確認された範囲は大山寺、大神山神社、奥宮、阿弥陀堂を中心に、さらに広い範囲にわたることが確認できました。その広さは、東京ドーム15～16個分に相当します。この範囲の中では、少なくとも158カ所の僧坊跡や関連する施設の跡と考えられる平坦地が残っており、左陀川の右岸（大山寺東地区）、と左岸（大山寺西地区）、寂静山地区の尾根は、どの絵図にも描かれてい



▲ 昨年10月19日、大山寺僧坊跡発掘調査の現地説明会を開きました。（しろがね荘駐車場にて）

い僧坊跡が多くあることが分かります。少なくとも寛政9年（江戸時代中期）には、その辺りの僧坊はすでに廃れ、その存在すら忘れ去られていたのでしよう。僧坊跡の多くは、江戸時代の前期以前、とくに中世期を中心とする時期の僧坊跡と考えられます。

発掘調査による僧坊跡の解明

○学術的な調査から
絵図に描かれていない僧坊跡群は、いったいいつ頃営まれたのでしょうか？また、どのような構成だったのでしょうか？疑問は次々に湧いてきます。これらの謎に迫るため、町教

分布調査は今後も継続していきますので、今後新たに確認される僧坊跡もあると思います。これまでの分布調査と測量調査の成果によって、最も隆盛を極